

■ 展示方法

1. 過去実績について

(1) 美術部門

- 平成 25 年度～平成 29 年度には下記の展覧会を開催致しました。

開催年度	展覧会名	内容
平成 25 年度	コレクション版画展「菅井汲／松谷武判—print works」	芦屋ゆかりの画家菅井汲と元具体美術協会の松谷武判の版画作品を展示。作品の魅力に迫った。
平成 25 年度	アートピクニック vol.3 「マイホーム ユアホーム」	「home」をテーマに、現代美術家や写真家、障害があるとされる表現者の作品から、日常と美術の関係を考察。
平成 25 年度	「ゲンビ New era for creations—現代美術懇談会の軌跡 1952-1957」	現代美術懇談会(ゲンビ)が関西のモダンアートの形成にどのような影響を与えていたかを紹介。
平成 26 年度	「GUTAI×INTERNATIONAL 具体、海を渡る。」	具体の国際性に着目し、新たな具体像に迫った。
平成 26 年度	art trip vol.01「窓の外、恋の旅。／風景と表現」	下道基行や谷川俊太郎ら内外で活躍する作家の作品とともに当館コレクションを展示し、風景の魅力に迫った。
平成 27 年度	阪神沿線の文化 110 年「モダン芦屋 クロニクル—アート、ファッション、建築からたどる芦屋の芸術」	近代化が進んだ明治以降の芦屋のライフスタイルを歴史と美術から辿った。本展は、阪神電鉄大阪—神戸間開通 110 年を記念し阪神間の 7 館と阪神電鉄との 8 機関で共同企画、開催した。
平成 27 年度	「戦後のポーダレス 前衛陶芸の貌」	“戦後のポーダレス”をキーワードに、陶芸界にとどまらない多様な交流に着目し、前衛陶芸の深化の過程に迫った。
平成 28 年度	チャベックからチェコ・コミックまで—東欧の絵本大国 「チェコ絵本をめぐる旅」	チェコ絵本の伝統を気付いた草創期の巨匠から最新鋭の作家たちの作品を展覧し、幅広く奥深い魅力を紹介。
平成 28 年度	「未知の表現を求めて—吉原治良の挑戦」	関西を代表する前衛画家、吉原治良の大規模な回顧展。大阪新美術館建設準備室と共催。
平成 28 年度	art trip vol.02 「この世界の在り方—思考／芸術」	河川龍夫、伊藤存、小沢裕子、前谷康太郎らの作品と、彼らが選んだ当館コレクションから思考について考察。
平成 29 年度	「交差するアーティストたち—戦後の関西」展	「デモクラート美術家協会」「現代美術懇談会(ゲンビ)」「具体美術協会」など関西の美術を紹介。
平成 29 年度	「小杉武久 音楽のピクニック」	日本を代表する現代音楽の演奏家・作曲家である小杉武久の「音の世界」の全貌に迫った大規模展。



【様式2-6】 (6)芦屋市立美術博物館の事業運営
①展覧会事業について

(2)歴史部門

- 平成 25 年度～平成 29 年度には下記の展覧会を開催しました。

開催年度	展覧会名	内容
平成 25 年度	世界を魅了した青 浮世絵名品展	春信・歌麿の露草青、写楽の藍、北斎・広重のベルリンブルーといった、浮世絵の「青」に着目
平成 25 年度	学習雑誌にみるこどもの歴史	大正から発行される小学館の学年誌や附録などから、子どもの学びの歴史を紹介。
平成 26 年度	土器どき芦屋の物語―遺跡が語る芦屋の歴史―	芦屋市内の数多くの遺跡とその出土品を紹介することにより、芦屋の歴史がもつ魅力を再発見する。
平成 27 年度	浮世絵恋物語 ～浮いた話のひとつふたつ	錦絵創始 250 年にあたり、美人画のみならず、江戸時代の恋愛事情や物語に盛り込まれたエピソードも紹介
平成 29 年度	生誕 220 年 広重展	歌川広重の代表作「保永堂版東海道五十三次」全点展示など、生誕 220 年を迎えた広重の画業を一覧
平成 29 年度	春ひらく 芦屋のたからもの	芦屋市内の神社、寺に伝承する宝物を紹介。市指定文化財、岩園天神社絵馬など、貴重資料を一堂に展示
平成 25～29 年度	芦屋の歴史と文化財展	芦屋の歴史を古代～近代まで通観する。市指定文化財を順次展示。平成30年度は、昭和13年の阪神大水害から80年となることから、関連資料、当時の映像等を展示(予定)。
平成 25～29 年度	昔のくらし展	小学 3 年生の学習カリキュラムに応じた、むかしの道具と今の道具を比較しながら展示。団体鑑賞多数。



(3)その他

開催年度	展覧会名	内容
平成 27、29 年度	芦屋市展	居住地、年齢などを不問とする開かれた公募展として隔年開催。市長賞をはじめ、団体からの寄託賞多数。
平成 25～29 年度	芦屋市造形教育展	芦屋市内幼稚園、小・中学校の子どもたちの作品を全館にわたって展示。
平成 26 年度	光の空一阪神・淡路大震災から 20 年―芦屋	所蔵作品や資料を中心に、当時の記憶と記録を紹介するとともに、芦屋での「文化財レスキュー」などの活動を振り返りながら、美術と美術館の存在、その意義を改めて考えた。

【様式2-6】 (6)芦屋市立美術博物館の事業運営

①展覧会事業について

2. 展覧会案 ※タイトルはいずれも仮称。実施時期は予定。

平成 31 年度展覧会案
～市民参加、子どもへの教育に重点をおいた展覧会企画の拡充～

タイトル	第 65 回芦屋市展
実施時期	春頃
目的	市民ニーズの反映、新たな美の創造と発表の場の提供
	1948 年、「美術文化昂揚のために美術運動を展開することを目的」に芦屋市美術協会が創立され、同年 6 月に第 1 回芦屋市美術展覧会を開催(第 4 回以降は「芦屋市展」)、「何人も随意に応募することが出来ます」という全国でも類を見ない規定のもと、現在も続く歴史のある芦屋市展を継続し、隔年で開催する。 応募ジャンルは、平面、写真の 2 部門とする(第 64 回までと同じ)。従来回からの発展的企画として、特に若手の作家への応募意欲を高めるため「優秀若手賞」(例:30 歳以下)、「新人賞」(例:初回応募者の入選作品から選定)などを設ける。第 64 回では海外からの応募を可能としたが、英文での情報発信により海外応募、在日外国人等の応募を促進。国際文化都市芦屋のアイデンティティーの一環と位置づける。
タイトル	こどももおとな 美術とわたし/大人も子ども 私と美術
実施時期	夏頃
目的	コレクションの活用、子どもへの教育
	夏休みの時期にあわせ「学びあい」をテーマにコレクションを活用した、教育普及を目的とする展覧会。 解説文を大人用と子供用の 2 通りの内容を作成したり、作品を様々な角度から鑑賞する工夫を設けるなど、視点や観点を変えた作品の見方を紹介しながら、美術を楽しく学ぶ機会とする。
タイトル	描かれた神戸・大阪 一阪神名所図会と青山政吉一
実施時期	秋頃
目的	コレクションの活用、博物・美術連携、阪神間モダニズム考察
	大正時代に発行された阪神間の名所を描いた「阪神名所図会」と、昭和から平成にかけて水彩による風景画を描いた青山政吉を紹介する。 青山作品は、芦屋の風景画 36 点が当館に寄託されており、それらを初めて展示する。「阪神名所図会」のうち、芦屋の風景を描いたものと青山作品を並べて展示するなど、風景の描き方の違いや、時代の違いを比較する。
タイトル	art trip vol.3 「number」
実施時期	冬頃
目的	コレクションの活用、博物・美術連携、新たな価値観や美術の力の享受
	現代美術作品と当館コレクション作品を展示し、美術をとおして日常と美術との関わり方を見つめなおすとともに、我々の「世界」を再考するシリーズの第 3 弾。本展では生活の中に不可分な関係として存在する「数」をテーマとする。2014 年は「風景」をテーマに美術作品とともに詩を展示、2016 年は「思考」をテーマに現代美術と考古資料を展示、開催した。

【様式2-6】 (6)芦屋市立美術博物館の事業運営
①展覧会事業について

平成32年度展覧会案
～関西アートシーンの再評価～

タイトル	コレクション展 一風景一
実施時期	春頃
目的	コレクションの活用、地域の魅力を再発見、愛着の向上を図る
<p>海と山に恵まれた豊かな阪神間の土地は、様々な画家に描かれてきた。吉原治良、小出楯重といった芦屋ゆかりの画家をはじめとする、館所蔵の阪神間の風景を描いた作品と、そのモチーフとなった場所の現在の姿(写真パネル展示)を比較する。資料として作品分布図を作成、観覧後は持ち帰り、地域と作家、そして市民のつながりを再び考える機会となることを目指す。</p>	
タイトル	洋画の生まれた時／関西洋画の黎明期
実施時期	夏頃
目的	関西の美術史の再考
<p>明治期の洋画には、日本の伝統的な形状(扁額、柱掛、襖絵、杉戸絵、衝立等)に能や祝いのモチーフが描かれたものが見られる。それは和風建築に洋画を「需要」するために画家が工夫を重ねた手法の一つであった。中央画壇ではすぐに見かけなくなったものの、関西、特に京都では明治後期まで描かれており、新古美術品展や関西美術会展などに出品されていた。明治美術会創立や巴会結成に関わった川村清雄、その門下の桜井忠剛、吉益耳童らのほか、田村宗立、伊藤快彦、浅井忠、山内愚僊、松本硯生らの作品から、洋画需要の動向を考察するとともに関西における近代美術の歴史を辿る。</p>	
タイトル	没後55年 谷崎潤一郎 表紙絵、さし絵の世界展
実施時期	秋頃
目的	コレクションの活用、他館連携、谷崎と画家との関係性を考察
<p>谷崎潤一郎の著作のうち、初版には、交流のあった画家によるさし絵や表紙絵が描かれている(例: 錦木清方による「刺青」、小出楯重による「蓼食う虫」)。谷崎潤一郎館が所蔵する資料を紹介すると共に、その著作に描かれたさし絵の作者の絵画作品を同じ空間に展示することにより、文学作品と絵画が互いに影響しあっていることを紹介する。併せて、谷崎と画家との交流を示す書簡等の資料を展示する等によって、その関係性を検証し、このコラボレーションが生まれた背景を考察する。</p>	
タイトル	創造の証明ー児童雑誌「きりん」から
実施時期	冬頃
目的	コレクションの活用、子どもへの教育、具体の一考察
<p>1948年に創刊され、50年より日本童詩研究会が出版元となり井上靖や竹中郁、浮田要三らが編集した児童詩誌『きりん』は、具体美術協会と深い関わりをもつ。嶋本昭三や村上三郎、山崎つる子や田中敦子らは、そこに投稿された詩を創作した子どもらに絵画の指導をおこなうなど、『きりん』の形成に深く関わっていた。同時に、子どもたちの情熱的な表現に具体の会員たちも大きな影響を受け、彼らの制作はより先鋭的に展開していった。子どもと会員たちが与え合い受け止め合った美術表現について考察し、具体の一側面について紹介する。</p>	

【様式2-6】 (6)芦屋市立美術博物館の事業運営
①展覧会事業について

平成33年度展覧会案
～開館30周年 メモリアルイヤーを飾る～

タイトル	第66回 芦屋市展
実施時期	春頃
目的	市民ニーズの反映
第65回に同じ。	
タイトル	伊勢物語 —伊勢物語絵巻のすべて—
実施時期	秋頃
目的	コレクションの活用、伊勢物語における芦屋について考察
<p>芦屋ゆかりの歌物語「伊勢物語」に関連する館蔵資料のうち、伊勢物語絵巻(全2巻江戸時代)の全体を展示する(2巻を前後期に分け、1巻ずつ展示)。また、伊勢物語画帖(1冊江戸時代)についても、全面を展示する。両資料は、一部を展示したことはあるが、全ての面を展示したことがないことから、初の全面展示を行う。これにより、絵巻において、芦屋がどのような文脈の中に描かれているのか、視覚としてわかることができる。また、伊勢物語の古典籍を併せて紹介することにより、伊勢物語に登場する芦屋が、物語中でどのような位置付けにあり、意味合いを有しているのか、絵画と文学の両側面から考察する。</p>	
タイトル	没後90年 小出楯重展
実施時期	夏頃
目的	コレクションの活用、博物・美術連携、新たな側面からの考察
<p>近代洋画界に大きな足跡を残した画家、小出楯重(1887-1931)のモチーフの変遷に焦点を当てて作品を紹介する。作品とともに制作時期が分かる年表を展示し、描かれたモチーフの傾向から「芦屋期」の位置付けを再確認する。没後90年という節目に、自身が残した随筆や、当館が新しく寄託を受けた書簡などの資料も併せ、小出をとりまく制作環境を改めて探り、新たな資料から概観を試みる。また、小出が描いた谷崎の小説『蓼食う虫』の挿絵も展示し、谷崎潤一郎記念館との連携を図る。</p>	
タイトル	没後25年 村上三郎展
実施時期	冬頃
目的	コレクションの活用、他館連携、具体の一考察
<p>村上三郎(1925-1996)は関西学院大学哲学科を卒業後、芦屋ゆかりの画家伊藤継郎に洋画を学び、新制作派展に出品する中、同協会の先鋭的な若手作家とともに「0会」の創立に参加、抽象表現へと移行、その後、具体美術協会(具体)の会員となり中心作家として活躍した。《投球絵画》や通称「剥落する絵画」とともに、パフォーマンスの先駆的作品として世界的に知られる「紙破り」を発表するなど、従来の絵画表現を超えた作品を生み出していた。具体解散後は絵画を離れ、独自のパフォーマンスを中心に発表を行い、美術の枠にとらわれない活動を展開した。村上三郎が急逝してから25年目の節目の年に、国際的にも重要なアーティストである「村上三郎」の活動を振り返る回顧展を開催する。</p>	

【様式2-6】 (6)芦屋市立美術博物館の事業運営
①展覧会事業について

平成34年度展覧会案
～休館期間を利用したコレクション活用～

タイトル	子どもの具体展
実施時期	春頃
目的	コレクションの活用、子どもへの教育、前衛芸術への理解促進
<p>芦屋発の前衛美術グループ「具体美術協会」を、子どもにも分かりやすいよう「なぜ・どのようにして」描かれたのかを技法・問いかげを中心に、対象年齢を引き下げて紹介する。併せて鑑賞の手助けになるワークシートを作成、クイズ形式にするなどの仕掛けを作り、親子で気軽に足を運んでもらう機会をつくる。大人も一緒になって楽しみ、難しいと思われがちな現代美術を身近なものとして親しまれる内容を目指す。また具体の技法に習ったワークショップを実施し、制作プロセスから理解を深める場を設ける。</p>	
タイトル	浮世絵 美人画
実施時期	夏頃
目的	コレクションの活用、市民ニーズの反映、浮世絵美人画の魅力を紹介
<p>当館に寄託されている、片岡家蔵浮世絵のなかから美人画をセレクトすることに加え、「喜多川歌麿」「鈴木春信」「菱川師宣」等の浮世絵のなかの美人画を得意とした絵師の代表作、特に美人画を併せて展示し、それぞれを対照させながら、浮世絵美人画の特徴について、その魅力を紹介する。</p>	

【様式2-6】 (6)芦屋市立美術博物館の事業運営

①展覧会事業について

平成 35 年度展覧会案
～リニューアル記念 更なる進化へ走り出す～

タイトル	第 67 回 芦屋市展
実施時期	秋頃
目的	市民ニーズの反映
第 66 回に同じ。	
タイトル	具体展 1954－1972
実施時期	春頃
目的	コレクションの活用、具体および戦後美術の紹介
大規模改修工事のため、夏頃から 2023 年 3 月末まで休館となる。その期間を利用し、当館コレクションを中心とした「具体展」を全国美術館協議会で企画提案を行い、他館への巡回を視野に入れた開催を検討している。当館では、リニューアル後に開催し、新しくなった芦屋市立美術博物館のお披露目とともに、芦屋を代表する具体美術協会(具体)の重要性を改めて紹介する。	
タイトル	芦屋の歴史と文化財(拡大バージョン)
実施時期	秋頃
目的	コレクションの活用、他館連携、芦屋の歴史を貴重資料で通観
ほぼ常設展示である「芦屋の歴史と文化財」に加えて、2 階展示室を使用し、特に考古系資料に重点を置いた展示を行う。三条整理事務所と連携し、三条事務所保管の考古資料を中心に、芦屋市内各遺跡からの出土資料を全館にわたって紹介し、芦屋の歴史を通観する。	
タイトル	関西の写真史／芦屋カメラクラブ
実施時期	冬頃
目的	コレクションの活用、日本近代写真史の再考
1920 年代末から 30 年代にかけて日本では新興写真運動が起こった。それまでの絵画的な写真表現とは異なる、小型カメラによるスナップショットや、極端なクローズアップ、フォトグラム、フォトモンタージュといった技法を用いて、カメラやレンズによる機械の眼を生かした表現が展開した。 この時期の関西には、1904 年に結成された日本最古の写真団体といわれる浪華写真倶楽部では、安井仲治、小石清らがストレートフォトグラフィへと移行したり、中山岩太、ハナヤ勘兵衛らが芦屋で発足させた芦屋カメラクラブ(1930 年結成)、安井仲治、上田備山らを中心として活動した丹平写真倶楽部(1930 年結成)など、新興写真運動を牽引する団体が多く存在した。本展では、関西の写真の歴史とともに芦屋カメラクラブの活動を改めて紹介する。	

【様式2-6】 (6)芦屋市立美術博物館の事業運営
①展覧会事業について

平成 31 年から平成 35 年度にかけて 毎年同時期に開催する展覧会

タイトル	芦屋市造形教育展
実施時期	2月 ※大規模改修中を除く。
目的	子どもへの教育、市民ニーズの反映
<p>芦屋市内の幼稚園、小学校、中学校の子どもたちの作品を全館(歴史資料展示室を除く)にわたり展示。 主催：芦屋市教育委員会、芦屋市造形教育研究会 ※平成34年度は会場変更の必要あり。</p>	
タイトル	芦屋の歴史と文化財
実施時期	4月～11月 ※大規模改修中は期間短縮。
目的	コレクションの活用
<p>芦屋の歴史を古代、中世・近世、近代にわけ、それぞれの時代の主要な歴史資料を展示する。期間中、適宜展示替えを行う。</p>	
タイトル	昔のくらし展
実施時期	12月～2月 ※大規模改修中を除く。
目的	コレクションの活用、他館連携
<p>昔の人が大事に使っていた資料を通して、道具やくらしが変わってきたことには、人々のどんな知恵や願いが込められていたのかを考える。今のくらしができるようになった道具の進化や、人々の工夫を展観する。 ※芦屋市内小学3年生の団体鑑賞を想定。</p>	
タイトル	(タイトル未定) ※1階ホールにおける展示
実施時期	3月 ※大規模改修中を除く。
目的	現代美術・アートシーンの紹介
<p>当館は巨匠ル・コルビュジエの弟子で日本の近代建築において活躍した 1 人である坂倉準三が率いた坂倉建築研究所の設計で、建築物としても注目されるものであり、中でもホールは天井高 13m の吹き抜けで自然光が入り開放的な雰囲気をもつ特徴的な空間である。この度、当館のホールを現代美術の作家 1 名あるいは1グループに公開し、作家の創造力と構成力で自由な展示を行ってもらい、現代美術・アートシーンを紹介するとともに、空間の可能性を提示してもらう機会とする。</p> <p>なお、開催時期については、芦屋市内の幼・小・中の作品展示「造形教育展」が 2 月下旬から 3 月初旬に開催されるため、新年度までの期間は一日だけの展覧会やコンサートなどの短期間のイベントを開催していたが、平成 31 年度以降は、この期間を有効に活用していた展覧会やイベントを開催していく。</p>	

豊かな歴史的文化を発展・継承します。

< 教育普及事業について >

美術博物館は、地域社会と連携し、市民や利用者との交流を深めながら「学びの場」を提供する教育施設として大きな役割もっています。これまでに、展覧会にあわせた**講演会**や**ワークショップ**、**見学会**とともに、美術部門では、教育普及プログラムとしてワークショップを中心とした「**びはくルーム**」や講座「**まなびはく**」を開催、歴史部門では、**古文書講座**や見学会、ワークショップなどを開催してきました。また、本物の作品や資料と直接触れる機会として、校外学習等の受け入れを行い、子どもたちの感性や知識を豊かにほぐすため、学校団体の受け入れに努めています。

次期5年間でも、年間を通じて**学校団体の誘致・受入**を行うとともに、幅広い年代の方々に**体験していただける講座やイベント**を企画し、美術や歴史、文学のほか、**様々な文化に触れていただく学びの時間**を設け、芸術と人をつなぐ教育普及活動を積極的に行っていきたいと考えます。

■ 学校教育との連携

1. 学習機会の提供

- 夏休み期間を含む時期には、子ども及び親子連れを主な来館者として想定した展覧会(例:チェコの絵本展)や、子ども対象のワークショップやイベントなどを重点的に実施してきましたが、3期目においても、**夏季を中心に、子どもたちが本物の歴史・文化・芸術に触れ、感動する事業を企画**することとしています。
- これまで各展覧会ごとに学校用のチラシを別途作成し、全校生徒へ配布しています。団体鑑賞の際は担当学芸員が事前に教諭と相談のうえ、来館時の活動内容をコーディネートし、**鑑賞前のレクチャー**や**ギャラリートーク**を実施するほか、必要に応じて**ワークシートを作成**するなど、個別の対応を行っています。今後も、団体鑑賞への誘致を図るとともに、学びの場としての機能を深めていきます。
- 芦屋市教育委員会社会教育部青少年育成課が主催する、子どもの自主的な遊びを行う居場所を提供する「**あしやキッズスクエア**」に参加し、フロッタージュで採集した模様を組み合わせてキャラクターを作り絵本の場面を作るワークショップを行いました(平成28年度実施。平成30年度も予定)。今後も継続し、教育普及事業の充実を図ります。

< 幼稚園・保育園との連携 >

- 隣接する**伊勢幼稚園**とは**15年以上前から連携**を行っており、来館時には特設の「トンネル」を通して当館を訪れたり、**遊びで美術の楽しさを体験する場作り**を実施してきました。また、団体鑑賞後には絵を描いたり、造形遊びのワークショップを行い、**そこで得た感動をすぐに表現できる場の提供**も行っています。そのほか、春と秋に開催するアートマーケット「あしやつくる場」の会場で飾る「てるてる坊主」づくりや、当館の前庭を使って園児たちが制作したビニール素材の服を着て行うファッションショーなどを開催しています。このように、美術館を「**楽しい場所**」「**感性を高める場所**」として存在することを目指し、今後も継続していきたいと考えます。



【伊勢幼稚園 トンネル】

< 小学校との連携 >

- 展覧会の内容に応じ、市内の**学校園での出前授業**を行います。美術作品については、スライド等で紹介しながら対話型鑑賞を行い、作品の理解を高めたうえで現作品の鑑賞につなげ、本物の芸術を鑑賞する機会を設けます。歴史資料については、運搬が可能な資料を選び、実物を学校で鑑賞することによって、より多くの子どもたちが芦屋の歴史を体感できるよう、機材等を工夫します。

＜中学校・高校との連携＞

- 中学校については「トライやるウィーク」、高等学校については「芦屋高校職業紹介」等で、**美術博物館の仕事や活動を知っていただき、働くことの意義を考えてもらう**とともに、地域における芸術活動に触れていただく機会を設けています。次世代への教育という一面として、今後も引き続き積極的に行っていきたいと考えます。

＜大学との連携＞

- 大学では、**甲南大学、甲南女子大学、神戸女学院などが定期的に団体鑑賞で来館**しており、ギャラリートークやレクチャーを行い作品鑑賞の一助としていただいています。鑑賞後は各学校から展覧会や美術館へのレポート・感想文が提供され、展覧会企画・運営の振り返りの機会にもなっています。
- また、平成 29 年度より**甲南女子大学メディア表現学科の教諭と連携**し、当館でワークショップを行い美術館の役割について考える時間を設けています。これを継続・拡充し、他大学へも能動的な働きかけを行っていきます。
- 大学又は大学院で博物館学芸員資格取得をめざす学生を対象に、**毎年博物館実習を実施**しています。実資料を用いた作品取扱実習や教育普及事業の実習はもとより、学生たちが自分たちで一つの展覧会を企画し、発表するという創造性を発揮してもらいカリキュラムを組み入れていることが特徴です。3 期においても、全国の大学から受入れている門戸の広さを継続し、大学との連携を図ります。

2. 学校教育課程との連携

- 昭和初期から昭和 30 年代にかけて生活に使われた道具を紹介する「昔のくらし」展では、「おじいちゃん、おばあちゃんが子供だったころ」の暮らしを学習する**小学校 3 年生の教科書の内容を勘案した展示**を行います。時期についても、学習カリキュラムの時期に合わせ、毎年度12月から2月に開催します。また、学校側の希望を踏まえて、特に**ハンズオンを取り入れた展示**を計画します。
- 小学校の美術教諭が実施する芦屋市造形教育研究会に参加し、展覧会や教育普及活動等の案内を行うとともに、学校団体誘致に関する内容、造形教育展の広報活動や展示期間中のイベントなどの相談を行っています。**学校とのつながり**を一層深め、**美術教育現場のひとつとして当館を活用**していただくことを目指します。



【「昔のくらし」展】

3. 学校園の教職員に対する研修等

- 平成 26 年度より、神戸・阪神間美術館・博物館連携プログラム実行委員会（構成館：神戸市立博物館、神戸市立小磯記念美術館、神戸ファッション美術館、竹中大道具館）が実施する「人・博物館美術館をむすぶ文化芸術創造事業」内の「各館の特性を活かした研修と鑑賞プログラムの作成」として「**美術館・博物館と学校の連携を考える研修会**」で他館学芸員や学校教諭とともに研修会（「ミュージアム活用術」）を実施し、美術館の活用方法を共に検討してきました。
- 平成 29 年度からは本事業が発展した形で、神戸の文化発信実行委員会（美術館・博物館活用人材育成事業）が実施する、兵庫県内を中心とする美術館・博物館・文化施設 11 館からなる「**神戸の文化発信事業**」に**参加**し、学校教諭だけでなく、美術教育普及に興味のある大人に参加を呼びかけワークショップ（「ミュージアムエデュケーション研修会」）を行い、美術教育についての研修会を実施しています。今後も阪神間の美術館・博物館・文化施設、教育現場との連携を図り、教育普及活動を一層充実させていきます。



【研修会風景(平成 28・29 年度)】

■ 生涯学習との連携

1. 学習機会の提供

- 2 期目の 5 年間では、教育普及プログラムとして、美術を楽しみながら学び、難しさや面白さを感じていただけるよう、様々な内容の**ワークショップやアートトーク等を開催した「びはくルーム」**(平成 26—29 年度)や、美術家や美術史家、小説家などを講師に招き、**芸術の面白さ、楽しさ、難しさなどを発見していく講座「まなびはく」**(平成 30 年度)を開催し、子どもから大人まで幅広い年齢層の方々にご参加いただいています。次期も本プログラムを継続し、実際の体験から考えていく機会を大切にしながら、創造力や生きる力を育む機会を提供していきます。



【平成 28 年度 びはくルーム】

- 「びはくルーム」では、内外で活躍する美術家や建築家、作家などを講師に招き、真の芸術に触れる様々なワークショップを実施してきました。年齢により学習内容が異なる学校教育の現場とは異なり、**様々な年齢層の参加者が隣り合うことで、思いがけない感性の出会いや意識を高めあう場**になったと考えます。今後も芸術体験を深め合える美術教育の現場として存在していきたいと考えます。
- 平成 29 年度に芦屋市教育委員会生涯学習課、芦屋市谷崎潤一郎記念館と協力し、**芦屋文化ゾーン講座「学芸員が語る芦屋の歴史・文学・美術」を開催**、考古学、文学、美術というそれぞれの分野から芦屋を紹介しました。芸術文化を通覧できた本講座は、芦屋の文化・芸術を知っていただけたとともに、芦屋の「宝」「守っていくべきもの」について改めて認識していただけたと考えます。今後は市内のその他の文化施設とも連携し、継続・発展させていきたいと考えます。
- これまでの教育普及活動を継続・発展させながら、新たな取り組みも行っていきたいと考えます。来館者が作品の理解を深めていただけるよう**「美術鑑賞教材」の開発**や、市内に点在する野外彫刻や様々な施設で展示されている作品のほか、文化的建造物などを地図に記した**「市内アートマップ」**を作成し、芦屋の芸術に一層親しみをもっていただけるよう、努めていきたいと考えます。
- 歴史部門では、「芦屋の歴史と文化財」展の関連事業として**「古文書講座」を開催**し、ギャラリートークと組み合わせて行うことで、芦屋ゆかりの資料を多角的に解説しました。3期においても、展覧会の関連事業としての「講演会」、「上映会」、「ワークショップ」、「ギャラリートーク」などを拡充し、市民の生涯学習を支援します。
- ホームページで過去の展覧会や図録など、これまでの活動を紹介し、市民の調査研究の一助とします。

2. 他の生涯学習施設等との連携

- 全国の美術館・博物館 389 館が参加する**「全国美術館会議」の教育普及研究部会に所属**しています。講演会や学芸員研修会などの研究会に積極的に参加し、ここで得た知識や体験に生かし、未来の世代に美術作品やその歴史を伝えるとともに地域社会と連携しながら、教育普及活動を一層努めていきたいと考えます。
- 他館との連携として、阪神間の美術館・博物館と連携した活動をおこなっています。平成 26 年度に開催した「光の空—阪神・淡路大震災から 20 年—芦屋」展では、関連事業として、同時期に震災関連の企画を実施していた**文化施設 9 館と連携**し、各館の担当者から担当者へ対話形式で繋ぐ**「阪神・淡路大震災 20 年・語り継ぐこと／リレートーク」**という試みを行いました。
- また、平成 28 年度の「未知の表現を求めて—吉原治良の挑戦」展では、**大阪新美術館建設準備室と共催**し、吉原治良の全貌に迫りました。平成 30 年度の「チャベック兄弟と子どもの世界」展では、**西宮市大谷記念美術館と伊丹市立美術館と連携**し、美術館をより一層楽しめるような仕掛け作りとして、入館料の相互割引や広報の相互協力を行います。次期も他館との連携を継続して行い、**芦屋の芸術・文化を多角的なアプローチで捉え、広く紹介**していきたいと考えます。
- 芦屋市民センター公民館では、関西一円の展覧会に関連する講演会等の関連事業を実施しており、その一環として、美術博物館での展覧会に関連する講演会を実施しています(平成 29 年度「広重」展、平成 30 年度「万葉のセゾン」展等)。引き続き、**芦屋市民センターとの連携を強化し、市民の学習機会の拡大**を図ります。



【リレートーク風景】